

発行所 福島県中学校教育研究会社会科研究部
 発行人 大橋 誠 寿
 発行 平成 27 年 3 月 1 日

内 容

- 平成27年度以降の研究主題・副主題の解説…………… 2～4
- 県中教研いわき大会を終えて…………… 5
- 県中教研いわき大会に参加して…………… 5



研究主題の「立ち向かう力」と28年答申予定の新学習指導要領

福島県中学校教育研究会社会科専門部長 大橋 誠寿

まずはじめに、平成26年度の活動を振り返ってみたいと思います。

1 迫力ある県大会でした。お世話になりました。

県研究協議会いわき大会が10月7日(火)、いわき市立錦中学校を会場に開催されました。いわき支部の「研究推進はいわきから」の合い言葉のとおり、研究協議も活発に展開され、今後の授業に役立つ大きな成果を得ることができました。いわき支部部長の古山隆一校長先生をはじめ、大会役員の皆様会場校の中山正彦校長先生、授業をご提供いただいた3名の先生方に心から感謝申し上げます。

2 平成26年9月に東北社教研の役員会が山形市で開催され、次の事項が正式に確認されました。

平成29年度の東北大会(第54回)は、①福島県の県大会(会津地区)と同時開催とし、②中学校のみの大会とする。③平成28年度東北社教研の役員会を福島市で開催する。

3 全中社研滋賀大会に2名が参加しました。

11月6日～7日に開催された全国中学校社会科教育研究大会滋賀大会に県副部長の古山隆一校長先生と附属中の村上淳先生が、県代表として参加しました。平成38年の「全中社・福島大会」にむけて、今後も毎年、数名を県代表として全国大会に派遣できるように努力してまいります。

4 社会科部会ホームページを各支部でも活用願います。

県社会科のHPは各支部でも活用することが可能です。部報や県大会の案内の掲載等だけではなく、

各支部の研究推進にも、大いに活用していただき、各支部の特色あるページを作っていただければ幸いです。

5 最後に、28年度答申予定と伝えられている新学習指導要領と次年度からの研究主題について考えてみたいと思います。(プロとしての主体性を見失う事なかれ！)

2020年(東京オリンピックの年)完全実施をめざして、学習指導要領の改訂作業が進められており、遅くとも平成28年度には新学習指導要領の答申があると予想されています。中心的話題は、OECDが提唱するキー・コンピテンシーの育成、表現力、探究心等を備えた人間育成を目指す国際パカロレアのカリキュラム、ユネスコが提唱する持続可能な開発のための教育(ESD)等です。

そして、諮問文に繰り返し登場するキーワードは「アクティブ・ラーニング」です。一般的には「能動的学習」と訳され、文科省では「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習」と説明しています。また、シティズンシップ(市民性)教育の必要性も叫ばれています。

これら全てが、社会科の教科目標や指導内容と深く関わっていますが、改訂の動きで最も大きな変化は、新学習指導要領が、指導内容のみならず、指導方法まで規定するようになる、と予想されていることです。

私たち社会科部会の研究主題のキーワードは「立ち向かう力」です。生徒に主体性を求める私たち社会科教員自身が、「教えのプロとして、学説や流行などに惑わされる事なく、教育改革の動向に自ら立ち向かい、自信を深めて教壇に立ちたい」と考えています。

平成26年度福島県中学校教育研究会社会科研究部組織一覧

| 部長 大橋 誠寿 | | 副部長 渡邊 健順・影山 健・澤崎 俊哉・吉内 次夫・古山 隆一 | | | |
|-------------------|-----------|----------------------------------|-------|--------------|---------|
| 支 部 | 支部長名 | 勤務校 | 支 部 | 支部長名 | 勤務校 |
| 福 島 | 大 橋 誠 寿 | 蓬 萊 中 | 東 白 川 | 藤 田 義 一 | 棚 倉 中 |
| 伊 達 | 家 久 来 三 典 | 月 館 中 | 北 会 津 | 深 谷 哲 三 | 若 松 三 中 |
| 安 達 | 渡 邊 健 順 | 大 玉 中 | 耶 麻 | 澤 崎 俊 哉 | 山 都 中 |
| 郡 山 | 佐 藤 俊 彦 | 熱 海 中 | 両 沼 | 酒 井 央 | 昭 和 中 |
| 岩 瀬 | 影 山 健 | 須 賀 川 二 中 | 南 会 津 | 室 井 正 之 | 南 会 津 中 |
| 石 川 | 鈴 木 路 人 | 小 平 中 | 相 馬 | 吉 内 次 夫 | 中 村 一 中 |
| 田 村 | 佐 藤 祐 也 | 三 春 中 | 双 葉 | | |
| 西 白 河 | 星 喜 博 | 東 北 中 | い わ き | 古 山 隆 一 | 江 名 中 |
| 事務局 総務 鶴巻 厚保(附属中) | | 庶務 安田 雄生(下郷中) | | 会計 村上 淳(附属中) | |

研究主題及び研究副主題の解説

1 研究主題及び研究副主題

研究主題

社会の変化に主体的に立ち向かう力を育成する社会科の指導はどうすればよいか

研究副主題

平成27年度 「社会的事象を多面的・多角的にとらえさせる指導の工夫」
 平成28年度 「根拠を基に思考・判断する力を育てる指導の工夫」
 平成29年度 「表現する力を高める指導の工夫」

2 今までの研究の成果と課題

これまでの3年間の研究では、「自ら学び、社会にはたらきかける力を育成するための社会科の授業はどうあればよいか」を研究主題に、各年次ごとに副主題を設定して研究実践を行ってきた。その結果、以下のことが確認された。

研究1年次

「社会的事象について追究する意欲を高める授業の工夫」

- 資料の選択・提示・活用の工夫で、生徒の学習意欲を喚起し、社会的事象について多面的・多角的に考えようとする意欲を高めることができた。
- 生徒の興味・関心や既習事項を生かした発問の工夫で、話し合いが活性化し、生徒の追究意欲を高めることができた。
- グループで話し合い、様々な意見を出し合うことで、多面的・多角的な見方・考え方を形成することができた。

研究2年次

「社会的事象どうしを関連づける力を育てる授業の工夫」

- 教師が事前に単元構造図を作成することで、社会的事象の関連性を把握することができ、単元のなかで関連づける活動を意図的に設定することができた。
- 単元を通じた学習課題を設定することで、生徒の追究意欲を持続させつつ、段階的に社会認識を深めることができた。

研究3年次

「社会的事象を主体的にとらえ表現する力を育てる授業の工夫」

- 単元構造図の作成により、自分の考えをもたせるまでの過程が明確になった。
- 多様な形態で表現する場面を設定することにより、様々な方法で考えを表現し合い、それに基づきよりよい考えを見出すことができた。

3年間の研究実践を通して、以上のような成果と

ともに新たな課題も確認された。

- 社会認識をより深めるために相互評価させるなど、言語活動を中心とした表現活動について研究を続ける必要がある。
- 話し合う際に聞き役になってしまう生徒や、自分の発表だけで終わってしまう生徒がいる。事前に考えをもたせてから話し合わせたり、教師がコーディネーターしたりするなど話し合いについて研究を続ける必要がある。
- 自分の考えをもたせるには、単元構成を考える際に資料や教材の精選を図る必要がある。
- よりよい考えをしっかりと自分の言葉で表現する力を身に付けさせる必要がある。

3 平成27年度からの研究主題の設定について

(1) 今までの研究の取り組みから

社会にはたらきかける力を育成するために、追究意欲を高めたり、よりよい考えをもたせたりする多様な方法が確認された。課題としては、社会認識を深めるための話し合いや相互評価、自分の考えを論理的に説明したり記述したりする表現力が挙げられた。これらの課題を解決していくためには、授業における言語活動の充実を図り、思考力・判断力・表現力の育成に継続して取り組む必要がある。

(2) 時代の要請から

第2期教育振興基本計画では、社会の急激な変化に対して、一人ひとりの自立した個人が多様な個性・能力を生かし、他者と協働しながら新たな価値を創造していくことが提言されている。それを社会を生き抜く力とし、確かな学力を確実に身に付け、生きる力をより一層育むことが求められている。

(3) 各支部の意見から

各支部からは、社会参画、表現、見方や考え方、確かな学力に関することなどの研究を進めたいという意見が挙げられた。その中でも、よりよい社会を形成していくために生徒の社会参画に関する力を育みたいという意見が多く出された。

以上のことを踏まえ、生徒に育みたい力を「社会の変化に主体的に立ち向かう力」とした。東日本大震災がもたらした苦難に負けず、立ち向かい、福島県からよりよい社会のあり方を提言できる力の基礎を生徒に育みたい。

4 研究主題について

(1) 「社会の変化」について

生産年齢人口の減少、グローバル化や情報化、価値観の多様化などに伴って、国際関係はもとより国内でも様々な課題が山積している。このような課題を解決し、持続可能な社会を築いていくためには、社会の変化を的確にとらえるとともに、主体的な社会参画の態度が必要になる。

特に本県においては、東日本大震災以来「復興の担い手」として期待される中学生に、確かな社会認識と変化の激しい社会を生き抜く力を身に付けさせることは喫緊の課題である。

(2) 「主体的に立ち向かう力」について

社会の急激な変化がもたらす困難に直面したときに、課題解決に協働して取り組み、主体的に立ち向かえる生徒になってほしい。そのために必要なことは、よりよい社会を築くために、主体的に考え行動する実践力である。中学生の段階では実際に行動することは難しいが、成人して社会で活躍すべきときに、率先して行動するための基礎力を十分に養いたい。

主体的に立ち向かう力を構成する要素を次のように考えた。

主体的に立ち向かうために必要な要素

- ① よりよい社会を築こうとする意欲
- ② 社会の現状や変化を的確にとらえる力
- ③ よりよい社会を考え、判断する力
- ④ よりよい社会をめざし協働して取り組む力

①～④の他にも様々な要素が考えられるので、各支部で検討してほしい。

②が主に1年次、③が主に2年次、④が主に3年次の研究となる。①は3年間共通して取り組む研究となる。

5 研究副主題について

(1) 平成27年度(研究1年次)

社会的事象を多面的・多角的にとらえさせる指導の工夫

社会の変化に主体的に立ち向かうためには、まず社会的事象を的確にとらえる必要がある。社会的事象は様々な側面をもっており、どの立場から見るとらえ方が異なってくるため、適切に資料を活用しながら様々な見方や考え方を養う必要がある。社会的事象を多面的・多角的にとらえさせる指導を工夫していくことで、生徒の発想が多様化し、様々な意見を基に、よりよい考えに練り上げることができるようになる。1年次は社会の変化に主体的に立ち向かうために必要な、社会の現状を的確にとらえる力を育みたい。

(2) 平成28年度(研究2年次)

根拠を基に思考・判断する力を育てる指導の工夫

主体的に立ち向かう力の基盤となるものは、自ら考え、判断する力である。生徒が思考・判断するためには根拠が必要であり、社会的事象を多面的・多角的にとらえることが前提となる。また、社会の形成者としての自覚と、よりよい社会づくりへの意欲もなければならない。2年次は、どのような資料をどのように活用させて根拠を獲得させるか、その根拠を基にどのように生徒に思考・判断させるかを吟味した指導を工夫したい。

なお、思考・判断するためには表現を切り離すことはできないが、2年次は特に思考・判断に焦点をあてたい。

(3) 平成29年度(研究3年次)

表現する力を高める指導の工夫

3年次は、1・2年次の研究をふまえ、生徒に

根拠に基づく考えを表現させる。多様な価値観をもつ人々のなかで、自分の考えを表現し、相手を納得させたり合意形成を図ったりする過程で、よりよい考えや新たな価値が創造される。このように他者へ向けて表現する学習活動を繰り返すことで、社会の形成者の一員であることを実感し、主体的かつ協働的に社会参画する意欲と社会の変化に立ち向かう力が育成されていく。

したがって、3年次の表現力とは、思考力や判断力も含めた総合的な力である。

中学生の段階では実際に社会に働きかけることは難しいが、特に公民的分野では、可能であれば社会への提言にも取り組みたい。

6 研究1年次の副主題の解説

(1) 「社会的事象を多面的・多角的にとらえさせる」について

① 「社会的事象」について

部報45号で次のように定義している。

社会的事象とは、社会科で生徒が観察し、理解し、認識し、説明する対象となるものであり、社会あるいは社会生活を構成する要素と考えられている。その対象が時間的現象としてとらえられる場合、歴史的事象と呼ばれている。また、空間的現象、地域的現象としてとらえられる場合、地理的事象と呼ばれている。

さらに今年度は、社会的事象そのものが様々な面をもっていていることに着目したい。

② 「多面的・多角的にとらえさせる」について

多面的とは、社会的事象が様々な面をもっていていることである。社会的事象は、例えば地理的、歴史的、政治的、社会的、法的、文化的などの様々な側面をもっていている。多角的とは、社会的事象を様々な角度から考察し理解することである。例えば、歴史的分野では身分、地理的分野や公民的分野では、国民、政府、企業など、社会的事象を見る立場が異なることが多角的である。社会的事象は、どの側面を、どの立場からとらえるかにより、認識する内容は大きく変化し、一面的な考察や理解に陥る場合もある。そこで、多面的・多角的に考察し理解するために、資料を活用することが大切である。

(2) 授業を構築する際のポイント

次のようなことを、各支部の実態に応じて取捨選択しながら取り組んでいきたい。これ以外でも、目的を達成するために各支部で工夫しながら取り組み、生徒が社会的事象を多面的・多角的にとらえられるようにしていきたい。

① 単元構造図の作成

生徒に社会的事象を多面的・多角的にとらえさせるためには、まず教師が社会的事象がもつ多面性を多角的にとらえなければならない。そのためには、その社会的事象は、どのような知識や概念で構成されているのか、そしてその知識や概念をどこでどのように習得させるのかなどを単元構造図を作成して整理することが有効であろう。

② 学習課題の工夫

学習課題を工夫し、生徒が多面的・多角的に考察するような課題を設けたい。例えば次のような課題を工夫したい。

- ・単元を通して様々な立場で追究する課題
- ・複数の視点から考察して意思決定を迫る課題
- ・固定観念や今までに学んだ知識や概念を揺さぶるような課題

③ 資料活用について

多面的・多角的にとらえるためには資料に基づいて考察する必要がある。そのために適切な資料活用を検討したい。資料活用とは資料を収集、選択、処理、活用することなどである。例えば次のような工夫をしたい。

- ・教師による多面的・多角的な資料の作成、提示
- ・生徒による多面的・多角的な資料の収集、選択、作成
- ・多面的・多角的にとらえるための資料に基づいた話し合い

④ ICT活用の工夫

ICTを活用することで、効率的かつ効果的な資料活用ができるであろう。例えば次のような活用を工夫したい。

- ・インターネットを利用した資料検索や収集
- ・タブレット型パソコンのカメラやボイスレコーダーを利用した取材や資料作成
- ・電子黒板や実物投影機を利用した資料提示
- ・GIS(地理情報システム)を利用した地図作成

③資料活用とICT活用は密接な関連があるが、資料活用以外でも様々な活用が考えられる。より効果的な使用を工夫したい。ただしICT活用は生徒の資料活用能力を高めたり思考を促したりするための手段であり目的ではない点に注意したい。

⑤ 学習形態の工夫

生徒が多面的・多角的に考察する際に、一人の生徒がいろいろな立場で考察する方法もあるが、次のように人数や形態や方法を工夫したい。

- ・ペア、グループ、学級全体での考察
- ・ロールプレイングを用いてある立場になりきっての考察
- ・ディベートを取り入れ立場を固定した考察
- ・パネルディスカッションを取り入れた様々な立場からの考察

⑥ 評価の工夫

授業を振り返り、社会的事象を多面的・多角的にとらえ、自分の認識が深まったことに気付けば、その他の場面でも社会的事象を多面的・多角的にとらえようと思うであろう。

次のような評価を工夫したい。

- ・生徒の発言や文章などから多面的・多角的にとらえた点を教師が肯定的にフィードバックする評価
- ・自分では気付かなかった新たな点に友達を通して気付かせるための相互評価

7 1年次の研究計画と研究分野

(1) 研究計画

- ① 主題研修会（5月上旬 郡山市内中学校）
 - 主題・副主題の確認
 - 研究内容・方法の確認
- ② 主題研修報告会（5月末日まで 各支部）
 - 主題研修会の報告
 - 支部研究計画の立案
- ③ 支部研究協議会（7月下旬まで 各支部）
 - 研究実践の経過報告
 - 以後の研究の進め方の確認
- ④ 県研究協議会県中・県南大会（10月）
 - 公開授業（郡山市立郡山第三中学校）
 - 代表支部の研究発表と協議
- ⑤ 県大会報告（10月～11月 各支部）
- ⑥ 研究部報第49号の発行（3月）
 - 本年度研究のまとめ
 - 次年度副主題の解説

(2) 研究分野

- 1年生 } 各自が地理的分野と歴史的分野の
 2年生 } いずれかを選択
 3年生 … 公民的分野

《参考文献》

- 「中学校学習指導要領解説社会編」文部科学省 日本文教出版
 「知識の構造図」北俊夫 明治図書
 「新教育課程と社会科の授業構想」北俊夫 明治図書
 「新・社会科授業研究の進め方ハンドブック」北俊夫 向山行雄 明治図書
 「社会科重要語句300の基礎知識」森分孝治 片上宗二編集 明治図書
 「新版社会科教育事典」日本社会科教育学会編集 ぎょうせい
 「金沢大学附属中学校研究紀要第54号・55号」金沢大学附属中学校

「平成26年度福島県中学校教育研究協議会いわき大会を終えて」

いわき支部長 古山 隆一

本年度の県中教研いわき大会・社会科部会は、「研究発進はいわきから」を合い言葉に、いわき市立錦中学校を会場として開催されました。主題・副主題への取り組みは勿論、まとめの年であることを意識した研究協議会を行ったところ、変則的な日程でご不便をおかけしたにもかかわらず、県内各地から参加いただいた支部代表の先生方はじめ、いわき支部会員、双葉地区からの参加者合わせて100名弱の参加をもって無事、研修を深めることができました。

いわき支部では、3年次の研究の方向性として、次のことに主眼を置いた研究を推進してきました。「基礎学力の向上」を基盤としつつ「社会的事象に対する『自分なりの考え』を交流させ、『よりよい考え』をもたせるための授業のデザイン」とし、これまでの研

究の成果と連続性を考慮して、今年度も単元構成・設計の工夫に取り組み、「自分の考えをもつまでの過程」を柱とした単元デザインを行いました。

また、「表現する力を育む交流活動の工夫」に注目し、生徒がいずれ社会の参画者として社会に対するよりよい考えをもつために、「自分なりの考え」をまとめ、発表し合い、「よりよい考え」をもつための手立てについて検討することをいわきの社会科教員が全体として取り組み、錦中における成果の発表としました。

最後に、大橋誠寿専門部長様をはじめ、事務局、指導助言の先生方、錦中の先生方、県内各支部の先生方、いわき支部会員のご理解とご協力により、本大会を成功裏の内に終えることができましたことに、心より感謝と御礼申し上げます。

「平成26年度福島県中学校教育研究協議会いわき大会に参加して」

北塩原村立第一中学校 稲場 哲郎

今回のいわき大会では、はじめに「社会科はSMA Pである」という、いわき支部の古山校長先生のお話がありました。Sはスマイル、Mはミッション、Aはアクション、Pはパッションです。この言葉で日々悩みながら教材研究に取り組む私たちを激励してくださいました。各支部の先生方の報告をお聴きし、授業を参観させていただいて、今年度の研究副主題である「社会的事象を主体的にとらえ表現する力を育てる授業の工夫」について、ふだんの授業の取り組みがいかに大切であるかを考えることができました。毎時間の授業の最後に必ず考えたことを自分の言葉で書かせる取り

組み、単元の最後に感想を書かせ、そこから課題を生徒自らが発見し追究していく取り組み、また、生徒の考えを深める話し合いの工夫や指導のあり方等のすばらしい授業がありました。そしてその裏には、生徒に何を身に付けさせたいのかが明らかにされた単元を通した指導計画があり、目に見えない先生方の日々の授業実践の努力と生徒たちの毎時間の授業の積み重ねがあるのだということを実感しました。さらには、よりよい授業について教師同士で議論することもとても大切であることを感じました。これからは生徒にとってかけがえのない1時間の授業づくりを大切に努力していきたいと思えます。

各支部代表の参加分科会配当表

| | | 福島 | 伊達 | 安達 | 郡山 | 岩瀬 | 石川 | 田村 | し東 ら西 かわ | 北 会 津 | 耶 麻 | 両 沼 | 南 会 津 | 相 馬 | 双 葉 | い わ き |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----------------|-------------|--------|--------|-------------|--------|--------|-------------|
| 27 | 地理 | ○ | ○ | | ● | | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ● | | | ○ |
| | 歴史 | | ○ | ○ | ○ | ○ | ● | | | ○ | ○ | ○ | | ● | | |
| | 公民 | ○ | | ○ | | ○ | ○ | ● | ○ | | ○ | | | ○ | | ● |
| 28 | 地理 | ● | | ○ | ○ | ● | ○ | ○ | | | ○ | ○ | | ○ | | |
| | 歴史 | ○ | ● | | | | ○ | ○ | ● | ○ | ○ | | | ○ | | ○ |
| | 公民 | | ○ | ● | ○ | ○ | | | ○ | ● | | ○ | ○ | | | ○ |
| 29 | 地理 | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | ○ | ● | ○ | | | ○ | | ● |
| | 歴史 | ● | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | ● | ○ | | | ○ |
| | 公民 | ○ | ○ | | ● | | ○ | ○ | | ○ | ● | ○ | | ○ | | |

●=発表 ○=参加 □=県大会開催地区